



宗英道株式会社

代表取締役 大城宗貞氏

サンゴから生まれたコーヒーがサンゴを育てる。
一杯のコーヒーが未来の環境保護へ繋がっていく。

連携パターン

事業者主導による商品開発

参入のきっかけ

- 風化サンゴの活用
- サンゴ移植による地域貢献



沖電開発に移植してもらったベビーサンゴ。活動の様子はブログで随時報告される。

■「サンゴでコーヒー焙煎」の記

白地に黒で「35」と書かれたスタイリッシュなロゴマークを目にしたことはないだろうか。サンゴ焙煎コーヒーを販売する「35(スリーファイブ)COFFEE」のマークだ。3年前に販売されてから今日まで、企業コラボなども含め多くのメディアで紹介され続けている。

35COFFEEは沖縄の風化サンゴで豆を焙煎しており、まろやかでクリアな味わいと深い芳香が魅力だ。サンゴが県外持ち出し禁止品なため、沖縄限定商品と言える。特徴的なのは、売上の一部を使ってベビーサンゴの移植に取り組んでいることだろう。サンゴ焙煎を思いついたのは偶然だったと宗英道株式会社代表取締役の大城宗貞氏は話す。

「サンゴが減っていることは観光客やダイバー達から聞いていました。たまたま、風化したサンゴを使った商品の売り込み

があった日に若手スタッフと食事をしていて、コーヒーショップが素敵だねという話になり、うちでもできるんじゃないか、それならサンゴを使ってはどうだろうと思ったのがきっかけです」

宗英道はハーブティー等を販売しており、ノウハウは十分あった。顧客層も9割は県外だったので、コーヒーもただ販売するのではなく、沖縄らしいものにと考えたそう。

「まず知り合いのコーヒー業者に頼んで焙煎してもらいましたが、温めたサンゴの熱で焙煎するために通常の倍以上の時間がかかってしまった。ただ味はとても良く、コーヒーインストラクターにも朝食にあうコーヒーだとお墨付きを頂いたので、その路線で売り出すことにしたんです。ここまでは順調だったのですが、いざ名前をつけて販売となった時に何か違うなど。そこで原点に立ち返って考えた結果が、売上を使ってのベビーサンゴ移植です。スタッフに地元で貢献している意識、環境への高い問題意識を持って



JAとのコラボ商品「35カラーゲンコーヒー」。豆の一粒一粒にカラーゲンがコーティングされている。

もらいたかったのと、子供達ひいては沖縄の未来のために何かしたかった」

プレスリリースした企業理念には多くの賛同が寄せられた。「35」と名付けたのも、ただの「サンゴ(35)」ではなく、様々な意味を込めてのことだ。サンゴだけが環境問題ではないが、小さなきっかけにでもなればと大城氏は願う。企業理念にこだわって常に会社のモチベーションを高く持つ。

■多種多様のコラボと最終目標

宗英道は賛同企業と一緒に多くのコラボ商品を販売してきた。ざっとあげてもTシャツ、アイスバー、コーヒー味のちんすこう、スイーツ等があり、賛同企業も南都酒造所、JAなど多岐にわたる。県内アーティストが中心になって作ったCDでライブも開いた。年内にもあと2アイテム、コラボ商品の販売を予定している。

「コラボする目的は利益や宣伝よりも、サンゴ移植等がメインです。ささやかでも環境や沖縄の未来への意識を持ってもらうのが僕らの目的です。沖縄は観光立県ですから、その資源になる海や空を大事にして次世代、次々世代へ引き継いでいかなきゃ、沖縄はどんどんダメになってしまいます」。大城氏は、「一人一人の心にサンゴを植えている」と考えて活動をしているそうだ。

「最終的には、35COFFEEが製造販売中止になればいいと思っていますよ。サンゴ移植活動をしなくてもいいくらい、沖縄の海が綺麗になって、サンゴが増えれば、僕らはお役御免です」

35COFFEEを購入していくお客様の中にはありがとうとお礼を言ってくる方もいるそうだ。心のどこかで環境問題を気にかけている証拠である。自分の飲むコーヒーがサンゴの助けになればとても嬉しい。サンゴと沖縄をつなぐのが35COFFEEなのだ。